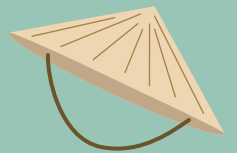


Workcamp in Vietnam

summer 2023



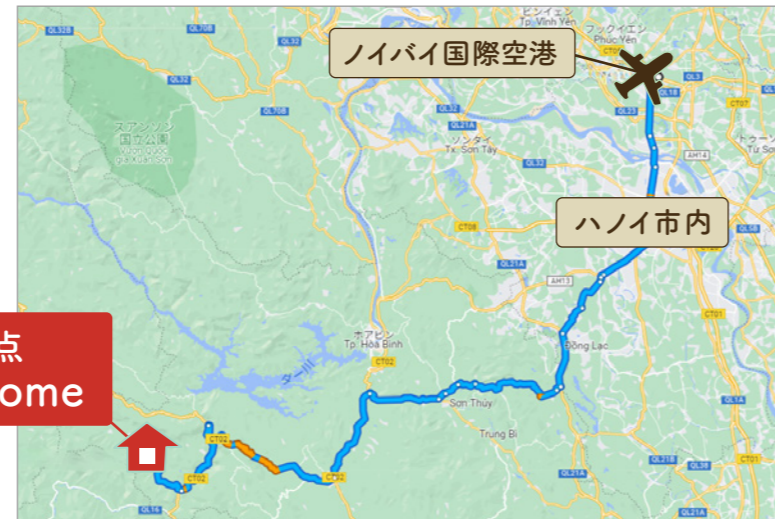
Here is Buoc village!!





マイチャウ町ブオック村 Mai Chau Buoc

首都ハノイから車で4時間ほどのベトナム北部の山間部にある村。「Eco Home」と呼ばれる施設を拠点に活動しました。



活動拠点
Eco Home

活動拠点 Eco Home

宿泊場所、食事、アクティビティの場所は全部Eco Home!たわいもない会話をしたり、アクティビティの準備をしたり、毎日のミーティングをしたりと、たくさんの思い出がある忘れられない場所になりました!



寝床
食事処



ワークで建設したお店

Eco Homeからは200mほどの場所!周りにはフルーツ、雑貨などの売店がありました!

ブオック村は中国南部から移住してきたタイ民族の暮らす、純粋な風景を残す小さな村。山々と緑に囲まれており、この自然環境のために村民は農業を頼りにした生活を送っています。

かつては、川に隣接して住み、川の水を使って庭仕事をしていましたが、雨季の洪水により全てを流してしまうため川近くで暮らすのは非常に危険でした。そのため、政府がもっと高い土地へ移住できるように援助し、木造の伝統的で永住可能な家屋が建設されました。新しいブオック村が再建設され始めてから20年以上が過ぎ、最近では頑丈な家や舗装道路、電気といったものが基本的な生活環境となっています。

インフラが新しくなる一方、村人の教育と現代社会への理解に関しては未だ充分でない現状があります。

サッカーフィールド



ベトナムでは子どもから大人までサッカーが大人気のスポーツ!朝から夜までずっとサッカー場は賑やか!Eco Homeの目の前にありました!

子どもたちと遊んだ川

ほぼ毎日子どもたちと川で遊びました!藻を投げ合ったり、川に飛び込んだり、子どもたちとの距離が一気に縮まりました!



西尾市国際青年ワークキャンプ派遣団 公式Instagram

インスタ班を中心に、たくさんの投稿をしました!

団員の自己紹介、事前研修の様子、ワークキャンプ中の活動、帰国した後の団員個人の感想などが投稿されています。ぜひチェックしてください!

＼ 私たちがインスタ班です! /



@nishio_workcamp



第1期生の活動も投稿しています!

令和4年度第1期生はフィリピン共和国パンパン村に派遣

研修後に市内のベトナム料理店で懇親会



フォー & 生春巻き

事前研修

ワークキャンプを成功させるために事前研修を3回行いました！最初はみんな緊張していましたが、研修を重ねるにつれてチームワークも高まってきました。



自己紹介と参加動機を発表！

第1回目 6月23日

- 顔合わせ
- ワークキャンプの説明



市内ベトナム食材店で買い出し！



みんなでベトナム料理作りに挑戦！

第2回目 7月14日

- ベトナムランチ作り
- グループ課題発表
- ワークキャンプ経験者との座談会

第3回目 8月27日

- 渡航前の最終確認
- 目標設定



英語でアクティビティ！



みんなでワークキャンプの目標を設定！

事後研修と帰国報告会

渡航前の緊張と楽しみが、渡航後には達成感と寂しさが変わっていました！



帰国後、空港にて

9月22日

- 振り返り・目標
- 市長への帰国報告



団員それぞれの今後の目標を発表！



市長に帰国報告！

村のお店づくりのお手伝い

ブオック村では住民からの要望で、日本で言うコンビニエンスストアのような店舗を建設しました。コンクリート造り、レンガの積み上げ、壁にコンクリートを塗って均すなどの作業をしました。ほとんどの団員が初めての経験でしたが、全員で協力して、5日間でお店を完成させることができました！村に新しいお店が出来たことで、住民の快適な暮らしに貢献できたと思います！たくさんの村の人が見に来てくれました！

～お店ができるまでをご紹介します～

① コンクリート造り



② 基礎造り



作業前の様子

☀ 日中は気温が高く暑いので朝6:30から作業を開始！



名前を刻みました！



真っ直ぐ並べるのが難しい



コンクリートの量を調整！



真剣な眼差し！

お店完成！

④ 壁均し



なかなかコンクリートが壁に付かなくて苦戦...



村の子どもたちとの交流

グループに分かれて、さまざまなアクティビティを企画しました！見慣れない外国人が理由なのか、始めはうまくコミュニケーションが取れなかったり、子どもたちが攻撃的な態度を見せてきました。しかし、団員が企画したゲームやアクティビティに徐々に興味を示してくれて心配もなくなりました。村を離れる日が近づくにつれて子どもたちとの距離も縮まり、私たちに会いにEco Homeに遊びに来てくれました。子どもたちの笑顔が本当に忘れられません！

サッカー



日本文化紹介



日本食づくり



川遊び



イス取りゲーム



輪投げ



ベトナムメンバーの紹介



ナム
現地団体の
コーディネーター



トアン
大学生
ボランティア

いつも陽気なナム！でもワークなどでは真剣に教えてくれます！

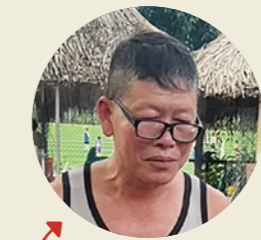
優しいトアン！英語が話せない場面でも理解しようと耳を傾けてくれました

ホストファミリーの紹介

タイおじいちゃん

おばあちゃん

お父さん



ご飯担当！

英語話せる！



リサお母さん



ミン

やんちゃで
元気っ子

村の食事

食事はタイおじいちゃんが作ってくれました！野菜が少なく、肉料理が多かったです。日本では食べたことないバツヤや幼虫もみんなで挑戦しました。食べてみると意外においしくてびっくり！ヒヨコになりかけの卵や犬肉も！複雑な気持ちもありましたが、貴重な経験ができました。みんなで食事をしたことを思い出すとベトナムに戻りたい！





あおやま
青山 なのほ

趣味は旅行と食べる。派遣中に見つけた特技は、ベトナムの虫に1回も刺されなかったこと！

初体験ばかりのベトナム！

今回、ベトナムでのワークキャンプを終えて、新しいことにチャレンジするおもしろさ、海外の人と英語やジェスチャーで会話することの楽しさ、また異文化を理解することの大切さに改めて気づかされました。

私は現在大学で国際教養学部所属しており、日本だけではなく海外の国の歴史や文化、現在起こっている諸問題について学んでいます。発展途上国についての授業は特に多く、今回の派遣先となったブオック村のような、日本とはまるで違う生活をしている人たちのことを学び、考えたりすることがよくあります。私は旅行でアメリカや中国などの先進国にしか訪れたことがなかったので、先進国ではない国の生活について考えることがとても難しいと感じていました。実際に自分の目で現地の状況や格差の現実を確かめてみたい、また日本の日常生活とは全く違うことを体験できると思い、このワークキャンプに参加しました。



実際に訪れてみると、ブオック村での生活はやはり日本での生活とはまるで違い、慣れるのは少し大変でした。バイクは歩行者を全く気にせず猛スピードで走ってくるし、虫がたくさんいるし、小学生くらいの子でも普通にバイクに乗っているし、日本では体験できないようなことがベトナムでは日常であることに衝撃を受けました。

しかし、それよりも楽しいことや感動すること、嬉しいことが数え切れないほどありました。日本とは違う、良い意味でゆったりした自然のままに過ごすブオック村の生活スタイルは、日本人の私たちにとってだんだん心地よいものになっていきました。

毎朝早朝に行ったお店作りのワークでは、慣れない作業の中でメンバーそれぞれが自分のできることに一生懸命取り組み、無事に完成させることができました。無事にお店を完成させることができたのも嬉しいことですが、メンバー全員で一つのことを現地の人と一緒にやり、全員で達成感を感じることができたことは、本当に意味のあるものだと思います。

ホストファミリーや村の人たち、子どもたちがみんな本当に優しくフレンドリーだったことが救いでした。初日は私たち日本人にあまり心を開いてくれていなかった子どもたちも、日を重ねるにつれて私たちと交流することを楽しんでくれるんだ、信頼してくれているんだとすることができました。子どもたち自ら翻訳アプリを使って、川に泳ぎに行こう！と誘ってくれたり、川に行くときにはバイクで迎えに来てくれたり、ゴミはちゃんとゴミ箱に捨ててねと言ったらちゃんと捨ててくれたり。言葉が通じない中で、日本人とベトナム人の間にこれほどの信頼関係を築くことができたことは、このワークキャンプでの一番の成果かなと思います。

村で過ごす最終日の夜、子どもたちがみんなでお別れの挨拶にわざわざ来てくれた時は本当に感動しました。私たちが村から出た後も、電話をかけてきてくれたり、メッセージで「今何してるの？」と送ってきてくれました。本当に嬉しかったし、心が通じ合うことができたのだなと感じました。ブオック村やベトナムを離れるときは本当に寂しかったです。私の人生の中で確実に大きな影響を与える体験だと感じています。



今回のワークキャンプを通してベトナムが本当に好きになったし、私の視野は確実に広がったと思います。言葉が通じなくても、自分の意思を伝えようとする姿勢、仲良くなろうと積極的に行動することが、コミュニケーションには大切だと思えるようになりました。異文化に触れるということはもちろん大変なことはあるけれど、その分楽しくて嬉しく感じるものがたくさんあるということに気づきました。このワークキャンプで感じた細かな感情や、気づいたことを忘れないようにたくさんの人に伝えていきたいです。また、西尾市で開催される交流イベントに積極的に参加したり、困っている外国の方を見かけた時にはお手伝いできるように努力したり、地域に貢献できるようにしたいです。

メンバーのみんなでも村やベトナムをまた訪れることができる日を楽しみにしています。

コラム ハノイの交通と景色

ベトナム滞在の最終日はハノイ市を観光しました。ブオック村とは違い、街は近代化していて人口も多く圧倒されました。



バイクの多さに圧倒されました！



夜まで一日中賑やか！

街には屋台が沢山！



いとう しゅん
伊藤 駿

趣味は野球を見ること！将来の夢は食品に関わる仕事をする事です！

人の笑顔と命を食べて生きるということ

僕にとって今回のワークキャンプが初めての海外でした。派遣の1日目、飛行機とバスの移動がありましたが、目に映るすべてがとても新鮮で「これは寝ている場合じゃない」と思いすべてを吸収するつもりでずっと外を見ていました。ベトナムの雰囲気は日本とは異なりとてもゆっくりとしていて優しさを感じました。でも、なんだか発展途上国が故のものというか、力強い荒々しさも併せ持っているようにも思いました。

村に着き、現地の子どもたちと初めて会った日、ベトナムではなるべく嫌な顔を見せることなく笑顔で過ごすという目標をもっていたので、子どもに楽しんでもらえるように自分が一番に楽しむように心がけました。最初はまともな受け答えもしてくれずバカにするような態度をとっていた子どもたちも遊ぶうちに楽しそうにしていって、よかったと思いました。

そんな子どもたちも日に日に僕たちを認めてくれたのか、あまり強引なことはせず一緒にあれをやらう、これをやらうと誘ってくれて、ベトナムの遊びや、おもちゃを教えてくださいました。目が合えば笑って話しかけるということをしていたおかげで、多くの子どもが僕と遊んでくれました。

一番分かり合えた子は、僕たちを泊めてくれた家の子でミンという男の子でした。はじめは蹴る、殴る、噛む、唾をかけられる、棒でたたかれると散々でしたが、ただやられて楽しそうに逃げているとよく遊んでくれる男の子でした。4日目、ミンがフリスビーで遊んでいたの、飛んできたフリスビーを投げ返すと楽しそうに拾って投げ返してきて遊んでくれました。無茶苦茶な方向に投げるので、僕が犬のように飛びついて遊んでいましたが「ミンもキャッチしてみよう」とジェスチャーを交えて伝えると最初はできませんでしたが、実際にキャッチできた時に見せてくれた笑顔がとてもかわいくてこちらもうれしく

なりました。それからミンが暇なときに僕を見つけると、フリスビーをもってきて遊ぼうというようなしぐさを見せてくれたり、座っていると膝の上に乗ってきてくれたり、食べているお菓子を分けてくれたりしました。

ミンのおばあちゃんも僕と目が合うたびに笑ってバナナをくれて、お店の建設作業の時はブロックの積み方を教えてくれたおじさんも「オッケー、オッケー」といつも素敵な笑顔で褒めてくれました。毎日ご飯を作ってくれたミンのおじいちゃんも「とてもおいしい、ありがとう」と言うといつでも優しく笑っていました。ベトナムの文化や言葉を教えてくれたミンのお母さんもいつも笑顔で話してくれました。通りかかる道でみんなが笑顔でおはようと声をかけてくれる、そんな村でいつでも笑顔でいる大切さを学んだと思います。



ベトナムからのボランティア参加者でTuanという男の子がいました。僕と歳も近く、ベトナムのことや考え方、多くのことを彼から学びました。いつだって前向きに何事も楽しんでいて、よく人のことを見ているなど感じることも多くありました。最終日僕と別れるときに「君は、ぼくの初めて会った日本人だよ。日本人はとてもいい人ばかりだ。」というようなことを言ってくれて、僕なんかで日本人を知っちゃだめだとは思いましたが、とてもうれしい言葉でした。僕もTuanを通じてベトナムを知り、ベトナム人の優しい印象を与えてくれたのも彼なので、とてもTuanには感謝しています。

ベトナムの食文化も僕にとっても大きな影響を与えてくれました。ベトナムではベトナム戦争において人々が食料不足から逃れるために、今までは食べてこなかった植物や、昆虫、犬や猫などを食べるしかなかった、生きていくためにはそうするしかなかったといいます。9月2日の独立記念日には、お祭りのような雰囲気です。いつもの料理とは別にイモムシや、バッタの揚げた料理を振舞って

れました。最初に見たときは、そのまま虫の形をしていて、今からこれを食べるのかと思いましたが、いざ覚悟を決めて食べてみると想像していたような虫の味がするのではなく、ただ何かを揚げたというようにしか感じませんでした。味も悪いわけではなく食感がいいカリッとしたものでした。

9月5日にはスペシャルディナーということで何が出てくるのだろうとワクワクしていると、犬のソーセージと、アヒルの孵化しかけのゆで卵が出てきました。これはさすがに昆虫と同じ気分を食べるというわけにはいかず、何分も葛藤した後、ベトナムでは何事にも挑戦するという目標のもと、一口ずつだけ食べることにしました。アヒルの姿が少し分かることや、いつも見ていた犬ということもあって、今までははっきりと分からなかったけれど食べるということは、確かに何かから命をもらっていることなんだと思いました。それと同時に「いただきます」「ごちそうさまでした」と言うことの自分なりの意味が見つけられたと思います。今までぼんやりと言っていた言葉ですが、食べて生きていく人間にとってとても重要な言葉だとはっきり分かりました。

食べることの楽しさや、食べることのできる幸せ、分け合って食べることの嬉しさをこの経験を通じて再認識し、食を通じて、誰かを笑顔にできるそんな人になれたらいいなとぼんやり思いました。

こんな経験ができたのもそれぞれ目的は違うけれど、一緒に参加して共に作業をした団員のみんながいてのことだと思っています。みんなからも多くのことを学びました。本当にありがとう。



かすや
糟谷 ひなた

海外の生活やネイティブの英語に触れるために参加。趣味は音楽を聴くこと、歌うこと！

理解すること挑戦すること

私がこのボランティアに参加した理由は、海外での活動やネイティブな英語に触れる機会が欲しいと思ったからです。

私は、高校生の時に、学校の海外派遣企画に参加しシンガポールへ訪れた経験があったり、小学生の時に英会話スクールに通っていたりと、元々海外へ興味がありました。さらに、大学に入ってから始めたホテルのフロントのアルバイトでは、従業員やお客様が海外の方である事が多く、英語を使ったコミュニケーションに挑戦して行くうちにより海外での活動に興味を持ちました。しかし、コロナの影響や成人式との兼ね合いでなかなかタイミングが合わず、大学1、2年生のときには、大学での留学や海外派遣が難しく、参加することができませんでした。こうした中で、今年の春に実家に帰省した際、母が西尾市で海外派遣の応募があると教えてくれたため、参加することを決めました。

この10日間のボランティア活動はとても楽しく充実したもので、特に考え方については多くの学びがありました。

一つ目は偏見を持たずに接することの大切さです。ベトナムでの生活では、自分とは生きてきた環境や文化が違うために、ルールや考え方も違うことが多くありました。そして、こうした違いには私はいい意味でも悪い意味でもショックを受けました。

例えば、トイレの仕組みも違って、使用した紙は流さずにゴミ箱に捨てたり、基本的にお菓子のゴミなどポイ捨てが多かったりなどです。しかし、現地の方の文化や環境を学んでみると、共通認識や常識が違うことが分かり、こうした違いが当たり前であるということに気がつきました。

そして、文化の違いや考え方の違いを念頭に置いておけば、相手に対して、非常識な人、迷惑な人と思ってコミュニケーションを辞めてしまうことは無くなるということ学びました。自分にとっての常識と違う行動を相手がとったとしてもそれは、そもそも常識の違いや考え方の違いから生まれたものであり、決して悪気があった

り自分勝手な行動であったりするわけではないからです。

相手が私と違う動きをするのは、ルールが違ったり、単純にルールを知らなかったりするだけかも知れないと考える事ができれば、まずは、「伝える」という行動がとれるようになるようになりました。ベトナムでの生活から偏見や思い込みで相手とのコミュニケーションを放棄するのではなく、まずは「伝えてみる」という考え方の大切さを学びました。

二つ目は挑戦することの大切さです。ベトナムは戦争で食べるものがなくなり、虫や犬など食べられるものならなんでも食べて飢えをしのいでいたという歴史があります。そのため、地域によっては昆虫食や犬を食べる食文化が未だに残っています。私たちが訪れたブオック村にもそうした文化が残っており、実際に夕飯には犬の肉が並びました。日本にはない文化であり、実家で犬を飼っているために複雑な気持ちになり、なかなか挑戦するには勇気が必要でした。しかし、挑戦して食べてみると身をもって文化の体験をすることができていると感じられ、ベトナムという国についてより深く学ぶことができたように感じました。また、現地の方と仲良くなるきっかけになったようにも思いました。



さらに、英語を使ったコミュニケーションに関しても、発音や正しい単語が分らず言葉に詰まってしまうこともありましたが、なるべく話せる部分や簡単なリアクションは英語を使うように意識しました。

なかなか伝わらないときもあり、もどかしい気持ちにもなりましたが、伝わったときにはどんどん挑戦しようと思えました。また、ジェスチャーも交えながらなんとか英語を使ったコミュニケーションを意識してみると、相手もなるべくわかりやすい単語やゆっくりとした話し方でコミュニケーションを続けてくれることが何回かありました。

このように、こちらが挑戦しようと行動すると相手も

同じように積極的に声をかけてくれるなど、交流や繋がりが生まれる事にも気がつきました。このことから、大切なことは挑戦する姿勢であり、正しい文法や発音が分からなくても、自分ができる限りの行動で挑戦してみることが重要だと学びました。

何かに挑戦することは緊張したり、恥じらいがあったりと、勇気を必要とすることが多いですが、挑戦することで得られるものの方がはるかに多いと感じました。まずは挑戦し、行動することに意味があると言うことを学ぶことができました。

こうした偏見を持たずに接する姿勢や、すぐに諦めずに挑戦する姿勢の大切さはベトナムに行き活動したことで、改めて考え直せた価値観であり、視野が広がることにも繋がったと感じました。これからも、この学びを忘れず日々の生活や学習に役立てていきたいです。



かのうりの 加納 璃乃

趣味は音楽を聴くこと。特に Mrs.GREEN APPLEが好きです！
特技は茶道と華道です！

挑戦と協力のワークキャンプ

私が国際ワークキャンプに参加した動機は他国の文化に実際に触れてみたかったことが第一です。現地に赴かなければ体験出来ないことに挑戦してみたかった思いで参加しました。

まず、日本とベトナムの生活の違いに驚いたことは虫に関する環境でした。夜になると小さな虫が光に集まり食事の中に入り込んできたり、ゴキブリやトンボも部屋に入ってきたりすることがありました。寝る際には蚊帳があったものの、小さな虫が蚊帳の中にも入り込んできて、慣れない環境で困難を感じました。しかしながら、自然環境と生活環境が日本とは大きく異なることを体感出来たことは貴重な経験であったと思います。

また、日本とベトナムの朝の違いにも驚かされたことが印象に残っています。朝日が昇っていない暗いうちから野生の鶏がかなりの頻度で鳴くため、その音で目を覚まされました。このような環境の違いも、新たな文化と生活様式に適應する過程で感じたことでした。



そして、セメントを一から作りブロック塀を積み上げてお店を建設する経験は海外派遣中に最も印象に残った思い出の一つです。手作りの壁を作ることは初めての経験であり、そのプロセスは非常に新鮮で刺激的でした。このプロジェクトはかなりの力仕事を伴いましたが、最終的にお店が完成した時には大きな達成感を得られると共に私たちの手で創り上げられたことに誇りを感じました。

現地の方々とは言葉が通じない状況でしたが、ジェスチャーや簡単な英語を駆使してコミュニケーションを取り、共同で作業を進めることができました。国籍や言語が異なる状況でも、共通の目標に向かって協力することで、互いを理解し支え合うことの重要性を実感しました。

この経験を通じて、お店づくりのプロセスだけでなく、異なる文化や言語に触れる機会を得ることができ、自己成長にとって貴重な経験となりました。このようなチームワークと協力の中で、国際的なつながりを感じ、未知の挑戦に立ち向かう自信を得ることができました。

慣れないベトナムでの生活では戸惑うことも多くありましたが、毎日違った体験ができ大変充実した6日間になりました。

そして、今回の経験を西尾市国際ワークキャンプ第3期生に繋げることが重要であると考えます。海外派遣で学んだことや交流することの大切さを伝えることは若い世代の国際的な価値観を養うのみならず、この事業の継続にも貢献できると考えます。

また、ベトナムで学んだことは西尾市に住むベトナム人の方々への理解へも繋がります。文化や価値観の違いから、日本人が思う当たり前のことが外国の方々には通じない場合を考えると、実際に近所に住む外国人の方の行動に理解できない経験がありました。以前は鬱陶しく思うこともありましたが、世界には様々な価値観があることを学んでからは考え方を改めることができました。狭い視野の中に留まらず相手の考え方を尊重できる人間になりたいです。住みやすい西尾市を作っていく為には自治体の取り組みに加え、多国籍社会に理解ある一人ひとりの考えや行動が大切であると考えます。

個人的には学んだことや経験を周りの人々と共有し、自身が持つ知識を広めていきたいと考えます。言葉の壁があってもコミュニケーションを図ろうとする姿勢は、相手とのコミュニケーションを通じて新たな関係を築く良い機会です。英語が完璧でなくても、積極的に会話にチャレンジしていきたいです。さらに、異なる文化を尊重し受け入れる姿勢を持つことは、国際的なコミュニケーションや協力において不可欠です。国際的な視野を持ち続け、他国の文化に対する興味を持ち続けることも大切であると思います。相手を理解し尊重することでより円滑な人間関係を築けるようになります。



くらうち ゆな 倉内 優奈

趣味は旅行することですが、海外経験は今回が初めて！特技はダンスです！

カルチャーショックから学んだこと

私は今回のブオック村滞在を通して、毎日たくさんのカルチャーショックを受けました。ブオック村はベトナムの中でもハノイなどの都市とは違って、自然に溢れたローカルな土地でした。村の人たちは自由でゆったりとした生活を送っている印象を受けました。私たちが寝泊まりした場所では自分の手で洗濯をしたり、お風呂のお湯が出ない日があったり、ごみの分別がなく地面に捨てられていたり、完全に日本とは違う生活を送りました。

そんな中で特に驚いたエピソードや文化をいくつか紹介します。

まず、食卓でもむしやバツタを食べたことです。私は元々虫が大の苦手で、触ることもできないほどでした。見た瞬間に全員がショックを受けていましたが、1人が食べて「意外とイケる！」と言いだしたのをきっかけに他のメンバーも食べ始めました。まさか自分の人生でもむしを食べる時が来るとは思いもしていませんでしたが、びくびくしながらも思い切って食べてみると案外おいしかったです。その後バツタが出てきた時には一切抵抗なくすぐに食べることができて、自分でも驚きました。現地コーディネーターのナムが、いつも私たちに何事にもトライしてみるように励ましてくれたおかげで、自分の中で殻を1つ破ったような感覚がありました。他には犬肉にもトライしましたが、飲み込むことができませんでした…。



食に関わる事以外にも、子どもたちからたくさんの刺激を受けました。村の子どもたちは全員が恐れ知らずで危なっかしく感じました。川では全員崖から飛び込んではタックルし合ったり、私たちに藻を投げてきたり、アグレッシブに感じることもありました。村では親が子どもたちを厳しくしつけするような事が少ないと聞きました。初日は私たちの話を聞こうとしなかったり、差別的なジェスチャーもしてきいたりしました。私たちが用意してきたアクティビティに興味を示してくれるのか不安でいっぱいでした。

しかし、そんな不安は一瞬で吹き飛びました。私たちが考えたゲームやアクティビティに興味津々で、毎日みんなの笑い声で溢れていました。巻き寿司を作る時も私たちの指示にしっかり耳を傾けてくれて安心したし、浴衣を着たい子を募った時に全力で手を挙げてアピールしてくれた時はみんな感動していました。そんな子どもたちの素直さがとっても可愛かったです。最終日の夜に会いに来てくれたり、お別れの後もビデオ通話をかけてきたり、初日との違いに驚かされながらも嬉しく思いました。他にも、子どもたちがみんな食わず嫌いをしないことが私の中で衝撃的でした。日本から持ってきた食べ物が何かを聞くこともせず手に取って食べていて、いもむしをあんなに嫌がった自分が恥ずかしくなるほどでした。

始めはただ「危険な恐れ知らず」だと思っていたものが、子どもたちの自然な「なんでもやってみるチャレンジ精神」だと気づいて、私たちが忘れていたものを思い出せたような10日間であったように感じました。

また、このワークキャンプを通して、国際ボランティアに興味を持ちました。旅行では現地の方と関わる機会があまりないのに対して、ボランティアでは現地の方とコミュニケーションを取りながら活動に取り組むので、達成感や絆を感じることができました。今後の人生の中で、仕事ではなくボランティアで海外に行きたいと思いました。自分の将来の進路についても、海外支部のある企業に就職して国際的に活躍していきたいと思いました。日本の生活は快適で過ごしやすい環境だけど海外経験を積んで常にわくわくするような挑戦をしていきたいと思っています。

他にも書ききれないほどエピソードがありますが、とにかくみんなと出会えてよかったと心から思える貴重な経験でした。



たなか しおん
田中 紫苑

特技はダンス！将来の夢は国際感覚を持ったビジネスパーソンになることです！

視野が広げ“させられた”10日間

私は将来、世界を相手に仕事をし、最終的に海外にルーツを持つ日本居住者の日本語教育に携わりたい、という漠然とした夢があります。そのための思考材料を得たい、という動機で応募しました。今回のワークキャンプは語学留学でも旅行でも得られない貴重な経験ばかりさせていただき、いい意味で無理やり視野が広げ“させられた”10日間であったと思います。

まずは、英語、ベトナム語など慣れない言語でのコミュニケーションでは多く学ぶものがありました。私は、今大学で5つの言語を学んでいますAIが発達した現代、わざわざ学ばなくても会話が出来るようになったので、外国語学部である自分に自信が持てませんでした。そんな感覚が変わったのは、子どもたちとのアクティビティの時です。

私はベトナム語が分からなかったため、Google翻訳を使って子どもたちと会話をしていました。もちろん言いたいことが伝わるし、会話を成立させることは可能だったのですが、とても言語の壁を感じました。すると女の子3人が私に近づいてきて、「初めまして。こんにちは。」と日本語で話しかけてくれました。その時、子どもたちがぐっと私に歩み寄ってくれた感じがして、やはりコミュニケーションというものは、ただの情報伝達ではなく、心と心のつながりでないといけなそう思いました。それからは小さな工夫ではあるが、言いたいことをGoogleで調べて、それを見せるのではなく声に出してコミュニケーションを取るようになりました。自分の口から伝えることにこれほど大きな力があると知ることができ、外国語学習の意味を見つけられたので、外国語学部での学習も今まで以上に真剣に取り組もうと思えました。

さらに、精神的にも大きく成長させられました。ベトナムに渡航する前の私は、完璧主義でプライドの高いところがあり、少しミスをするそれがずっと気になって仕方なくなってしまうような性格でした。

村に到着し生活が始まると、蚕やバッタや犬を食べたり、

村の中を鶏やバッファローが歩き回っていたり、水回りがありきれいでなかったり、ご飯に虫が止まっていたり、寝室にはコウモリが入ってくるなど、日本での生活とは全く違う環境で、正直ショックを受けました。

しかし、そこで過ごすしかなく、環境に文句を言っている時間などありませんでした。何をすることも、日本とは異なり、ただそこで毎日を生活しているだけで、世界の広さを感じさせられました。そうやって、どんどん未知のものへと挑戦し続け、受け入れ続けることで、自分の知っている世界はなんて狭かったんだ、と衝撃を受けました。毎分毎秒で世界の広さを感じさせられていると、今まで自分が固執してきたようなミスや、気にしていた人間関係なども小さなことであったと気づかされ、そんなことに振り回されていた自分が馬鹿だったと帰国した今思っています。



また、正直ベトナム渡航前の私は、とても頭の固い人間でした。「いい大学に行き、いい企業に就職してたくさん収入を得ることが幸せだ」と思い込んでいたのです。その勝手なこだわりのせいで、自分で勝手にプレッシャーを感じ続け、「その大学にいつまでして、そこに就職？」と言われてたくない、と将来に漠然とした不安を抱えていました。

しかし、村でのゆっくり流れる時間の中、村の人々が自然とともに生きていく姿や、大自然の中でたくましく、いつも笑顔で過ごす子どもたちを見て考えが変わりました。また、たまたま建国記念の祝日のタイミングでハノイから帰省してきていたホストファミリーの親戚や、村出身の同世代の若い人と話す機会があり、キャリアやビジネスにつ

いて話し合いをしてみました。ベトナムの人々はよく自分でビジネスを始めるほど上昇志向が高いことや、家族との生活を大事にするので仕事優先の日本人の生活とはライフスタイルが異なることなど、これまでの自分が見たこともない、出会ったこともない、まったく知らない生き方を知ることが出来ました。

日本の生活ももちろん良いですが、私にとってベトナムの生活もとても魅力的に感じました。そうやって、ハノイの生活、村の生活、その他ベトナム人の生活などを知っていくことで、自分がこれまで思っていた幸せの形はあくまで一例でしかなく、正解とは限らないと強く気づかされました。

私にとってこの10日間は、語学留学とも、海外研修や海外インターンとも違う、唯一無二の海外生活でした。ブオック村の人々と同じ目線で、同じような生活をし、決して過ごしやすいとは言えないこの環境に挑戦しなければ出会えなかった素敵な出会いをたくさんし、多くの人とコミュニケーションを取る中で、多くの刺激を受けました。10日間で、自分でも怖いほど、自分の中の固定概念が外部からの刺激によってほぐされていく感覚が分かりました。自分の中の当たり前が通用しない中、正直、「視野が広がった」という言葉だけで片付けていいのだろうか、というくらい価値観を変えられましたが、間違いなく言えることは、ベトナムに渡航する前の自分と、ベトナムから帰国した今の自分は確実に違う自分だということです。このワークキャンプに参加して良かったと心の底から思います。



これからは、この経験を糧に知識と教養溢れる豊かな人間になれるよう日々の学習を引き続き頑張っていきます。西尾市には多くのベトナム人が住んでいます。周りより少しベトナムの生活を知っている西尾市民として、ベトナム人と日本人の懸け橋になり、西尾に来たベトナム人が西尾は理解があり住みやすい街だと思ってもらえるように、多文化共生社会を作り上げるキーパーソンになりたいです。



ちょうなん あやみ
長南 朱海

趣味はドラマ鑑賞！将来の夢は色々な国の味を知っている管理栄養士になることです！

ベトナムの思い出

今回この派遣事業に参加したいと考えたのは、自分自身の経験として海外への知識を深めたいと考えたからです。今まで日本で生活し、経験してきたことだけでなく、海外へ行くことで現地の文化、雰囲気、人とのつながりを通してこれからの自分の糧になると思いました。海外に10日間滞在することはとても不安に感じていましたが、「なんとかかなる」という気持ちで応募をしました。実際に10日間を過ごし日本に帰ってきた時、「なんとかかなった」という気持ちが大きかったです。この派遣事業はたった10日間の期間でとても短かったですが、本当に行ってよかったと思いました。

村での滞在では現地の子どもたちのことが多く印象に残っています。まず、川で遊んだことが思い出として残っています。村の子どもたちと川で全力で遊んだことは、子どもたちとの距離を深めることができたきっかけでもありました。また、言葉が通じなくても一緒に遊んで、楽しんでくれていることが伝わってきて嬉しく感じたことを覚えています。今回の派遣事業で子どもたちと川で遊んだことがこんなにも大きな思い出になるとは思ってもいなかったです。



次に、村での滞在中にJapanese Dayという日本のことを現地の方々に知ってもらう時間があり、私は日本食を

紹介する班のメンバーでした。そこで、巻きずし、もち、抹茶、梅干しなどの日本食を子どもたちに作ることを体験してもらったり、実際に食べてもらったりしました。

私がそこで心に残っているのは、日本食を食べた時の子どもたちの表情です。日本食を食べた時のおいしそうな顔、おいしくなさそうな顔、なんともいえない顔などたくさん子どもたちの表情を見ることができました。子どもたちの色々な表情が見ることができ、食について勉強をしている私にとってとても良い経験となりました。子どもたちはどんな口に合わないものを食べた後でも他の日本食を食べてみよう、色々な食べ物を食べてくれました。子どもたちが色々な日本の食べ物に興味をもってきていることに驚いたことを覚えています。私が出来上がった日本食を子どもたちのいるテーブルの真ん中に置いたとき、すぐに子どもたちが手をのばして食べてくれるのを見て、とても感動しました。

私は、今回現地の子どもたちに日本食を食べてもらったように、子どもだけでなく大人、すべての人にとってなにか思い出に残るような食事を提供できる人になりたいとその時に強く思いました。私の中で、自分の将来について強く影響を受けたのはこのタイミングでした。



日本人メンバーとの思い出は数えきれないくらいたくさんあります。日本での事前研修では私はなかなか距離を縮めることができませんでした。ベトナムに出発するにあ



つちや はやと
土屋 駿斗

現地の人と深く関わる体験を求めて参加。趣味はDIYとサッカーです！

ワークキャンプでベトナム文化に触れて

ワークキャンプへの参加動機として、単なる観光ではなく、現地の人々と協力し、何か良いことを成し遂げたいという願望から生まれました。これまでの旅行では「お客さん」として異国の地を訪れることが多かったことから、今回は「参加者」として地元の人々と対等に交流できる機会を持つことができると思ったことと、私の年齢がワークキャンプの参加可能年齢の上限に迫っていたこともあり、参加を決意しました。

ワークキャンプの拠点となるEco Homeは山間部に位置し、うだるような暑さが待っていると予想していたのですが、日本と同程度の気候に迎えられました。夜間は少し肌寒く、毛布を掛けて寝ていたくらいです。宿泊施設は電気もあり、水道も通っていたため水洗トイレ、温水のシャワーも使用できるなど、想像よりも設備が充実しており快適に過ごすことができました。

— お店作り

ワークキャンプの主な活動としては、結婚で家族が増え自宅兼お店では手狭になるのでお店を新しく建てて欲しいという村の人の要望に応えることでした。私たちの活動目標は5日間でお店を新たに建てることに決まりました。自力で水と土を混ぜたコンクリートとレンガを使って壁を築いていきました。暑さ対策として日中は気温が高くなるので朝方の涼しい時間帯6時から9時までの短い時間に集中して作業を進めていました。

全員の努力と現地の人との協力の末、5日後にお店を完成させました。完成したお店の壁に自分たちの名前を彫ったので現地の人たちも私たちのことを思い出してくれると思います。

完成後に一緒に作業した現地の人と話す機会があり、「日本人たちは初めての作業だろうけど、一生懸命にやってくれたし、平行、垂直にもこだわって作ってくれたのでボランティアで来たどの国の人たちよりもいい建物だよ」と褒

たって、このことも不安の一つでありました。しかし、毎日一日中、一緒に生活していくなかで、ぐっと距離を縮めることができました。この10日間の中で、たくさんくだらないことでお腹を抱えて笑いました。10日間毎日一緒に家族以外の人と生活したのはこの派遣事業のメンバーが初めてでした。不安なことや心配なこと、つらいことをメンバーが聞いてくれたことがこの派遣事業を最後まで楽しく、一生懸命に取り組むことができた一番の私の中の支えでした。

最後に私はこの派遣事業に参加することができ、本当によかったと思っています。今まで日本であたり前と思っていたことはベトナムではあたり前ではなく、自分の中の固定概念を少し変えることができたことと日本に帰ってきて感じました。

私は、将来海外と直接関わる職に就きたいという気持ちはほとんどないです。しかし、私は自分の興味のある食を通じて海外と関わり続けることができたかなと思っています。この派遣事業への参加は私にとって意義のあるものになりました。

コラム ベトナム語ワンポイントレッスン！

ベトナム語は発音がとっても難しい！みんな積極的に使っていました！

🇯🇵 ありがとう！

🇻🇳 Cảm ơn! カムオン！

🇯🇵 美味しい！

🇻🇳 Ngon! ゴン！

🇯🇵 名前は〇〇です

🇻🇳 Tôi tên là 〇〇 トオイテンラ〇〇

🇯🇵 乾杯！

🇻🇳 1、2、3 zô! モッハイバソウ！

めてもらえました。全員が細かいところまで拘って作業できるのは日本人の強みだと再度認識しました。

— 現地の子どもたちとの交流

午後の時間帯は地元の子どもたちと遊びを通して交流していました。自由な時間を利用して、サッカーをしたり、川で泳いだり、日本文化を紹介しました。

特にサッカーはベトナムで人気のスポーツであり、現地の子供たちとの試合は楽しい思い出でした。日本から持ってきた笛とイエローカード、レッドカードを子どもたちに貸してみたら、レッドカードを出す遊びを始めたので、持って行ってよかったと思いました。川での遊びは、川でただ泳ぐだけでなく、落差5m以上の岩場から水面に飛び込んだことや水が冷たいのもあり、とても爽快でした。

子どもたちに日本文化を紹介した際は、興味深々で体験して喜んでくれました。体験では輪投げ、浴衣の着用体験、盆踊り、だるまさんが転んだ、イス取りゲームと一緒にやりました。食べ物では手巻き寿司、お餅、抹茶、みそ汁を紹介しました。大成功の要因として、みんなが日本にいるときからしっかり準備したこと、現地の子どもたちが日本文化に積極的に興味を示してくれたことがうまくかみ合った結果だと感じました。

子どもたちとの交流で一番思い出に残っている出来事としては、初日に1回だけ名前を教えただけに次の日遊ぶ際に多くの子どもたちが私の名前を覚えていたことにはさすがに驚きと嬉しさで一杯でした。



— まとめ

ワークキャンプを通じて多くのベトナムの人々と交流できた。普通にベトナム旅行をしただけでは知ることが難しいベトナムの歴史やベトナム人の考え方を知ることができ、ベトナムにより興味が沸くようになりました。

特に印象的だったのは、ベトナムのワークキャンプ受け入れ団体の設立の当初の理念が、多くの戸籍のない子ども

たちを救うためだということに心が動かされました。現在ではある程度改善されたいが、ベトナムの貧困層が川上に家を建て生活しており、そのため子どもたちが住所を持たないことから戸籍登録が難しい現実を教えてもらった。その時率直にまだまだ発展途上の国のため様々な問題も抱えているなと思いました。

しかし、行った場所、出会った人々全部に活気があり、今から高度成長に突入する国だと肌で感じました。それが現実になることを祈るほどには、このワークキャンプでベトナムに対して親近感を持ちました。

ベトナムではバイクが主たる移動手段であることは分かっているつもりでしたが、ハノイ市内のバイクの多さや、ブオック村の子どもたちも電動スクーターを使用して遊び場や学校に移動していたので、バイクがない生活は考えられないという感じでした。ホンダやヤマハ、スズキのバイクが多く走っていたので、日本人として無性に誇らかったです。

言葉を越えたコミュニケーションの大切さも感じましたが、それ以上に相手の知っている単語でどれだけ話せるかという語学力の重要性を感じました。

サッカーやルービックキューブなど言葉がなくてもコミュニケーションが取れる手段がありましたが、言葉で表現できないもどかしさはずっとついて回りました。主に英語で会話していましたが、耳は1日で慣れて相手が何を言っているかはすぐに分かるようになりましたが、自分の伝えたいことが言葉として出てこないことが悔しかったです。この旅行前に英語や簡単なベトナム語のスピーキングのスキルはもう少し向上させておく必要があったと感じました。

英語が通じない現地の人と会話の際には、簡単なベトナム語や日本語など相手が少しでもわかる単語が言い合えばお互い安心感が生まれ、心許せる仲間になれると感じました。日本で海外の人と話すときは日本語で話しかけるだけでなく、なんでもいいから相手の国の言語で話せるようになる心と心の距離が近づくと思いたので、今後は実践していきたいと思えます。

最後に、この経験を通じてベトナムの文化と人々に親近感を持ってました。異なる文化との交流を通じて新たな視野を広げ、言葉を越えて友情を持つことができました。今後も異なる文化に対する相互理解を持ちながら、国際的な友好関係を築いていきたいと思えます。



みつや のぶてる
三矢 展輝

趣味はバスケットと筋トレ！将来の夢は外国人にも対応できる救急救命士になることです！

素晴らしい体験

私は9月1日から10日までベトナムに行かせていただきました。自分にとってこの派遣は、分からないことだらけのチャレンジでありとても不安でしたが、派遣を振り返るととても価値のある経験だったと感じます。その中で特に思い出に残った3つを紹介したいと思います。



1つ目は、現地の子どもたちと関わる事ができたことです。私は今回の派遣の目標の1つに現地の子どもたちと関わりコミュニケーションをとることを挙げていました。子どもたちと会った初日は、中指を立てられたり、川に遊びに行ったら藻を投げられたりと、もしかして嫌われているのかと感じていましたが、どうやら受入団体のナムが言うには、彼らなりの仲良くなる方法だと言っていて少し安心しました。始めは戸惑いましたが、今では良い思い出になっています。

次の日から、Japanese Dayで輪投げや着物、日本料理を紹介したところ、子どもたちは自分が思っていた以上に乗り気で感動しました。特に日本料理を紹介したときはみんな仲良く席に座り、日本のいただきますをみんなで言って、巻き寿司を口いっぱい食べているところは、もう涙が出そうでした。

また、子どもたちは原付バイクより小さいくらいのバイクを持っていて、そのバイクに乗せてもらい一緒に川まで行く道りは日本では見られない果物、植物がたくさんあって鮮明に覚えています。

2つ目は、現地で合流した一般参加者のトワンとの思い出です。彼は初日から私たちボランティアの手伝いや最後のハノイ観光での観光案内などずっとフォローしてくれました。彼はハノイの大学に通っている大学生で、日本のことや、家族のこと、恋愛のこと、日本のアニメのことなど色々な話をしました。彼はギターがとてもうまく楽譜を見ながら日本の歌を、ギターで弾いてくれて私と一緒に歌を歌ってくれました。彼の話は面白くとても良い経験になりましたが、自分は英語が話せず、Google翻訳やジェスチャーを交えながらなんとか会話をしていました。私はそれがとても悔しくて彼と1年後英語が話せるようになってまたハノイに行くこと約束しました。

今後は英語の勉強をして話せるようになり彼との約束を果たしたいです。

3つ目は、日本の素晴らしさを感じたことです。まずハノイの空港に着陸する直前、飛行機からベトナムの街を一望していたところ、日本のホンダ、トヨタの工場がありました。その他にもたくさんの日本の会社が海外に進出していて驚きました。トアンに日本の車は人気ですか？と聞いたところ、「日本の車はエンジンがすごくいいからベトナムでは大人気だよ！」と言っていました。その他にも、宿泊場所のテレビにはドラえもんが流れているし、食事には味の素が使われていたり、日本が海外に与えている影響はすごいなと思いました。



最後に、このような素晴らしい事業を企画してくださった西尾市、一緒にワークキャンプに参加してくれたしゅん、ゆな、ひなた、しおん、りの、あやみ、やだ、つっちー、ななほ、けーすけ、NICEのやすさん、現地のナムやトワン、ホストマザー、ファザーや子どもたち、参加を理解してくれた家族、すべての方がいたからこそ、この派遣事業はうまくいったんだと思います。すべての方に感謝したいです。



やだ はるか
矢田 遥歌

趣味は旅行と朝ドラを見ること！
将来の夢はアジアと関わりのある
仕事をする事です！

成長を実感した10日間

私がこのワークキャンプに参加した理由は現地の人の暮らしを見たいという興味からです。大学でアジア地域を専攻していることから、アジアの歴史や情勢についてはある程度の知識を持っていると思っていましたが、その土地で人々がどのような生活を送っているのかはこれまで知る機会がありませんでした。そこで、現地の人の生活、文化、環境を学びたいと考え、西尾市青年国際ワークキャンプに参加しました。

私は以前、観光目的ですが、何度か海外に行ったことがありました。しかし、今回の派遣はそれまでの経験や、日本を比較すると異なることが多く、毎日がとても刺激的でした。

例えば、食事についてです。ブオック村での食事は毎日ホストファミリーが作ってくれましたが、日本では食べることが出来ないようなイモムシや犬などを食べる機会がありました。現地では村の中で犬や牛、豚、ニワトリなどを見る機会が多く、日本にいるよりもそれらの生き物たちとの距離が近いように感じました。そのため、日本で生活しては感じることはできない「命をいただく」という感覚を切に体感することが出来ました。新鮮な体験をした一方で、箸をつかった食事や、お米を主食としていることなど、日本と似ている部分もあり、安心感を持つ場面もありました。

この派遣の中で、特に印象に残っているのは現地の子どもたちとの浴衣の着付け、盆踊りのアクティビティです。私は浴衣班として派遣前から準備を行っていました。しかし、当日までは現地の子どもが浴衣を着たがるのか、興味を示してくれるのかとても不安でした。

しかし、浴衣を着たい！と話しかけてくれたり、扇子に興味を持ってくれたりする子どもが多く、予想よりも楽しんでくれたのがとても印象に残りました。他にも、日本から持ってきたお菓子や日本食にも興味を持ってくれる子どもが多く、もっと日本について知ってもらいたいという思いが日に日に強くなりました。また、何度も子ども

たちと川に入る機会がありました。始めは私たちに攻撃的だった子どもたちが、時間が経つにつれて私たちに心を開いてくれているということが分かり、言葉は分からなくてもジェスチャーを使うなど、伝えようとする気持ちが大切だということが身をもって感じられました。

お店づくりでは、コンクリート作り、ブロック塀作りなど、すべてが初めての経験でした。お店という形で見えるものができたことで、完成したときには、強い達成感を得ることが出来ました。

今回の派遣では異文化に触れることの大切さを学びました。日本にただいるだけでは経験できないことばかりで、毎日ワクワクすることばかりで、すべてが忘れられない経験です。日本にいたときはモノを持っていることが豊かさであり、そのことが心の豊かさにつながると考えていましたが、今回のワークキャンプを通して、モノが豊かさの基準なのではなく、経験や繋がり、現状への満足感が豊かさであるということが体感できました。

異文化に触れたことで、視野が広がり、もっと広く知りたいと思うきっかけになりました。今回の経験を今後の大学での勉強、将来に役立てていきたいと考えています。

また、ボランティア活動にも興味を改めて持ちました。西尾市に住む外国人が増加していることから、外国人が住みやすい街になるように少しでも貢献したいです。

この派遣が有意義なものになったのは、このメンバーで行けたからこそだと切に感じています。7月から8月に3回の事前研修がありましたが、そこでは知ることが出来なかった仲間の新たな一面に触れることができ、このメンバーだったからこそ、充実した10日間を過ごすことが出来たと感じています。



かとう けいすけ
加藤 蛍介

西尾市役所 市民部
地域つながり課 主事

今回が2回目の国際ワークキャンプ派遣事業となりました。私が担当に決まった時は、このような大切な事業が私に務まるのかと不安とプレッシャーがありましたが、NICEのヤスさんのサポートの中、派遣団員とともに研修を重ね、知識や交流を深めることができたおかげで充実した10日間を過ごすことができました。

この事業を進めるにあたり、この事業を始めた目的、団員それぞれの参加目的、私自身の多文化共生への視野を広げることを意識しました。その3つの目標は、帰国した今、1つ達成することができたと言えますが、同時に今後の私たち派遣団がどのように西尾市への貢献できるかが大事になると考えています。

団員にとってもブオック村の生活は、日本の生活とまるで違い、水回りは決して綺麗とは言えない衛生環境ですし、お風呂もありません。Wi-Fiもつながりにくく、日本では食べたことのない昆虫や動物を食べることを目の当たりにしてショックを受けた団員もいましたが、そこはチャレンジ精神で・・・トライしていました。現地に行かないと経験できないことばかりで、どんなことも新鮮で前向きに捉えていました。私自身も貴重な体験ができた実感しています。

この経験を一人一人が大切にして、派遣中に感じた気持ちや、気づいたことを身の回りにいる人に話し、これから出会う外国人にも積極的に触れ合って欲しいと思います。西尾市の多文化共生の推進にも一役買ってくれることも期待しています！

今後も皆さんと関わっていくことを本当に楽しみにしています！



いぐち やすのり
井口 育紀

特定非営利活動法人NICE
(日本国際ワークキャンプセンター)

初日の9月1日は活動先のブオック村まで一気に移動しました。ベトナムではバスでの移動でしたが、窓から見える街並みは赤いベトナム国旗に溢れていました。その理由は、翌日の9月2日はベトナムの独立記念日だったからです。私達は地域住民と交流し、共に独立記念日のお祝いをしました。

ベトナム人は、独立記念日に豪華な料理を作って、食べて、盛大にお祝いをします。日本の建国記念日はどうでしょう。ベトナムのようにお祝いするというイメージはあまりないかと思います。おそらくベトナム人は、世界のどこに住んでいようと、9月2日の独立記念日は盛大にお祝いをするでしょう。それは日本に住んでいるベトナム人も然りだと思えます。ベトナム人の習慣を知らないと「またどこかの外国人が騒いでる」と、トラブルになるかもしれません。

ワークキャンプは観光とは違い、地域コミュニティに深く入り、地域の方々に寄り添って活動します。参加団員は、ベトナムの方々に寄り添い、独立記念日と一緒に祝いしました。ただ騒いでいるだけではないことを経験から学びました。このような経験値があるかないかで、外国人への接し方は変わるのではないのでしょうか。

西尾市には三千人以上のベトナム人が住んでいます。今回の団員が西尾市に住む日本人とベトナム人の架け橋となり、グローバルな人材として西尾市で活躍していくことを願っています。

2023年度 西尾市青年国際ワークキャンプ派遣事業 第2期生 活動報告書



[主催]



西尾市市民部地域つながり課

〒445-8501 愛知県西尾市寄住町下田22番地

T E L 0563-65-2178

F A X 0563-56-2175

E-mail kouryu@city.nishio.lg.jp

[実施事業者]



西尾市国際交流協会

〒445-8501 愛知県西尾市寄住町下田22番地（地域つながり課内）

H P <https://nishio-nia.jp/>



特定非営利活動法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター）

〒245-0061 神奈川県横浜市戸塚区汲沢8-3-1

E-mail gw@nice1.gr.jp

H P <https://www.nice1.gr.jp/>